「底が突き抜けた」時代の歩き方572

個人と個人の結合にこそ組織力を胚胎せよ！ー映画『夜よ、こんにちは』『麦の穂をゆらす風』

「イタリア映画界最後の巨匠」と呼ばれるマルコ・ベロッキオ監督の映画『夜よ、こんにちは』（０３年）は、１９７８年にイタリアで起きた、極左武装組織「赤い旅団」によるアルド・モロ元首相誘拐・殺人事件をテーマに描いている。単なる史実を再現した作品ではなく、「旅団」の一員である女主人公（マヤ・サンス）の視線が挿入されながら、事件が問い直されていく。ヴェネツィア映画祭記者会見でベロッキオが、「誰に事件の責任があり、誰が背後にいたのかといった事柄には興味はない。私はただ、この残酷な悲劇の中に、悲惨な結末に抗う何かが見いだせないかを探りたかっただけだ」と語ったように、「この残酷な悲劇の中に」閉じ込められない女主人公の場所に、「悲惨な結末に抗う何か」を見出していこうとする。

作品の舞台はアパートの一室であり、そこに「赤い旅団」によって誘拐されてきたモロ元首相が監禁されている。旅団はモロの写真と、「モロを労働者階級（プロレタリア）の裁判にかける」という声明文を送りつける。テレビには、モロ誘拐の際に殉死した護衛官５人の葬儀が映し出されている。メンバーのリーダーがモロに対して、「プロレタリアの裁判には死刑がある。上告はない」と告げると、目隠しをされ、両手を椅子の後ろに縛りつけられたモロは、「妻に手紙を書きたい。党の友人にも」と返事をする。図書館に勤務する女主人公はアパートの外の世界とつながっており、自然に外の世界の目で事件を見つめるようになる。たとえば、叔母から会食に誘われた彼女は、その席で親族たちが歌う〝パルチザン〟の歌に心を動かされたり、彼女の兄と彼女の同僚が事件を巡って口論を始め、旅団の行動を支持する兄に対して、同僚が殺人者だと批判するのを聞く。

彼女以外にもう一人、外とつながっているメンバーがいる。彼が恋人に会いに行くのを他のメンバーが反対したために、口論となって彼はアパートを出て行く。メンバーは彼が旅団の行動だけに集中せず、恋人のことを考えていることが許せなかったのだ。だが彼は、旅団の行動によって恋人と会うことを制約されねばならなくなることに抗議していたのだ。彼は旅団の組織的な関係以外の恋人との関係のなかでも生きたかったのである。「赤い旅団」はモロに対して、死刑というプロレタリアの裁判の判決を下す。モロは妻に対して手紙を書き、孫へも手紙を書く。女主人公はモロの妻宛の手紙を読んで心を動かされるが、リーダーは自分たちの要求が通らないことに苛立ち、モロに対して「権威のある人に手紙を書け」と命じる。モロへの死刑が一歩ずつ近づいてくるなか、彼女は目隠しを取ったモロが監禁部屋から出て、アパートの中を自由に歩き回っている

夢を見始める。
　図書館で彼女は同僚に、「モロが妻に当てた手紙を新聞で読んで、父が読んでくれた『レジスタンスー死刑囚の手紙』という本を思い出した」と話す。旅団によるモロ誘拐を題材とする『夜よ、こんにちは』というシナリオを書いていた彼は、「モロは未だ死んでいない」と言う彼女に、「旅団メンバーの中に女性がいる」という自分のシナリオのストーリーを説明する。ローマ法王に宛てた手紙を書いたモロは、旅団メンバーに聞いてほしいと呼びかける。「政治犯の交換を行うように、イタリア政府に頼んでほしい」という文面を聞いて涙ぐむ彼女に、モロは「心に響く手紙かな？」と尋ねる。彼女は「いいえ、嫌いだわ。怒りから泣いたの」と答える。法王のもとに、無条件解放を旅団に対して要請してほしいという、政府からの手紙が届く。それに応えて法王は旅団に対して、モロの無条件解放を懇願する。政府は他方で、交霊術にまで頼り始め、モロが生きているのか、どこにいるのか、と交霊術に尋ねると、「月の上」という答えが返ってくる。
　彼女の勤めている図書館に警官隊が突入してきて、発覚したと思った彼女が観念して身を硬くすると、警官隊が連行して行ったのは意外にも同僚だった。彼女はモロが監禁部屋を出て、アパートの中を歩き回る夢を頻繁に見る。旅団が政府に対して要求していた期日が過ぎ、モロの死刑が刻一刻近づいてくる。苛立つメンバーは、モロに更に手紙を書け、と迫る。しかしモロは、「政府は自分を殉教者にして、旅団をつぶすつもりだ」と語る。殺されることを覚悟したモロを見て彼女は、「法王までがモロの解放を頼んできたことで、充分だ。殺すべきじゃない」と、モロの処刑に反対するが、他のメンバーは、「無条件解放はありえない」と、彼女の意見を斥ける。恋人のいるメンバーも処刑に反対して、「我々は間違っている。人々の理解は得られない」と言う。
　彼女は食事に睡眠薬を入れて、ナプキンに「食べないで」と書いてモロに知らせようとする。皆が寝てしまった後で彼女は監禁部屋の鍵を外す。モロは眠っている３人をよそに部屋から出、アパートの外に出て晴れやかな表情で大通りを歩いて行く。だがもう一つのシーンでは彼女は眠っており、目隠しされたモロが３人のメンバーによって部屋から連れ出されていく。そしてモロの葬儀の映像が流れる。「１９７８年５月９日、アルド・モロ殺害。誘拐の５５日後だった。誘拐犯と殺害犯は別々に逮捕され、終身刑に処せられた。現在、服役中の彼らは就労免除過程にある。国葬は法王パウロ６世により執り行われた。会場はローマの聖ヨハネ大聖堂。イタリア中の政治家が参列したが、モロ氏の遺体はなかった。遺族は列席を拒否し、ごく内輪の葬儀を行った」。映像のラストは、モロが外を軽やかに歩いていくシーンが映しだされる。
　映画パンフには、「赤い旅団」についての説明が記されている。
《１９７０年に誕生した、イタリアの極左武装集団。当初の主な活動はミラノやトリノでの極右勢力に反対する労働組合の支援であった。若年層の高い失業率や挙国一致体制への不満などを背景に勢力拡大を狙うが、労働者からの支持が得られず次第に過激な武力闘争に傾斜していく。

旅団の戦略はグループの工場に行員として雇われ、内部から襲うというものだった。こうして彼らはいくつかの破壊工作に携わり、次に重役の監禁を開始した。彼らの方策は深刻化し、「腿撃ち」に至る。これは権力に雇われた手先とみなされた現場監督の両足をピストルで撃つもの。次に起こったのがトリノのフィアット工場長。および判事マロ・ロッシの誘拐である。
１９７８年３月１６日、赤い旅団は、キリスト教民主党の党首アルド・モロを誘拐し、最もラジカルで最も派手な行動に出る。右派と共産党の歴史的な合意の立役者であり、信望厚いこの政治家は、彼らの目には反動勢力と、修正主義者と非難されたプロレタリアートの代表との、耐え難い馴れ合いの象徴と写った。５５日間の監禁の後、アルド・モロは１９７８年5月９日に殺害された。
１９８８年以後は、壊滅したと考えられていたが、１９９９年5月２０日、バッソリーノ労働大臣顧問のローマ大学教授マッシモ・ダントーナが暗殺され、「赤い旅団」名の２８ページにわたる犯行声明が出された。》
　同パンフに収められている日本女子大学文学部の北村暁夫によれば、《ファシズム体制のもとで第二次世界大戦を戦ったイタリアは、戦後、アメリカを盟主とする西側陣営に属し、議会制民主主義の国家として再出発した。政権の中枢に位置したのが、モーロも所属したキリスト教民主党だった。対する最大野党は、西欧最大の共産党となったイタリア共産党であ》り、反ファシズムのレジスタンス運動において《最大のパルチザンを擁》し、《重要な役割をはたした》実績のうえに、《大きな支持基盤を維持》してきたものの、《政権の座に就く》ことはできず、《キリスト教民主党を中心とする政権が続》いた。
《だが、１９７０年代に入ると、「鉛の時代」と呼ばれる社会不安の時代が到来する。戦後の体制を嫌悪する一部の右翼勢力が急進化し、爆弾テロを起すことで社会的緊張を生み、議会制民主主義を破壊しようとしていた。他方、左翼の側でも、１９６８年以後に高揚した学生運動のなかから急進化した若者たちが現れ、武装闘争によって革命を達成しようとした。１９７０年に結成された「赤い旅団」もその一つだ。》
《こうした左右両極からの攻撃を克服し、不安定な状態を脱するために》、モロによって《共産党を権力に取り込む大連立政権》が構想され、その最大の立役者となった彼は、キリスト教民主党左派に属し、カトリック系の労働組合と《密接な関係にあった。》
《１９７８年、モーロの呼びかけに応じて、共産党は閣外協力という形で政権に参加することを決める。しかし、武装闘争による権力の奪取を狙う「赤い旅団」から見れば、共産党がブルジョワの政党であるキリスト教民主党と協力して政権を支えることは野合であり、人民大衆への裏切りであった。この野合を阻止し、逮捕、拘留された仲間の解釈を勝ち取るために、彼らはモーロを誘拐した。》
　ベロッキオ監督は同パンフのインタビューで、「自分をレジスタンスの後継者と思ってい」る女主人公キアラによって、「モロも、殺されようとするパルチザンと同一視さ

れてい」ることを訊かれて、こう答えている。
「この点についてはずいぶん批判を受けた、『赤い旅団はナチとは違う！』ってね。僕はナチと旅団を比較したかったわけではなく、まったくの非人間性、ただキリスト教民主党の党首であるというだけで人を殺すことを選ぶ冷酷さを表現したかった。ブラゲッティは言っている、『この経験で恐ろしいのは、イデオロギーに盲目になるあまり、私たちが完全に人間性を失ってしまっていたということだ』と。キアラは状況の非人間性（武器を持たない、無防備な人間が死刑を宣告される）と、父に聞かされていたレジスタンスのイメージをつなぐ結び目になっている。アンナ・ラウラ・ブラゲッティの父親は、社会主義者でレジスタンスのシンパだったが、死刑宣告されたレジスタンス闘士の手紙を彼女に読んで聞かせていたんだ。彼女はしょっちゅう人に質問して、自分が信じがたい状況にいることに気がつくが、何もしなかったんだ。」
　文中の「アンナ・ラウラ・ブラゲッティ」とはモロ誘拐実行犯の一人で、彼女と電話で話をする中から女主人公キアラが生まれてきたと考えられる。「モロが路上を自由に歩いている」シーンについては、「これはモロの、想像上の、空想上の、幻想上の解放なんだ。僕は、彼が生きて路上を歩いているところを撮る一方で、現実も見せている。モロの死後のサン・ジャン・ド・ラトランでの葬儀だ。法王パウロ６世と、イタリアのすべての政治家が参列している。僕はこの二つの現実を同時に示したかった。これはスタイル上の問題で、道徳的な何かを言いたかったわけじゃない、モロが一人、微笑みながら歩いているというこのイメージ、これはとても短いイメージではあるけれど、観客が映画を見終わった後に残るイメージなんだ」と語っており、監督がこのシーンの中に「モロが路上を自由に歩いている」可能性もあったことを観客に訴えていたことがわかる。
　監督はインタビューで、女主人公の「キアラが働く図書館の同僚」について、「旅団の極端なテーゼに拠らずに政府に平和的に抵抗する可能性を提示するものとして存在する。それこそ僕が支持する立場なんだ」と主張し、「彼はキアラの〝良心〟のようなもの」で、「旅団を『愚かで、気違いじみている』と言い、旅団のメンバーである彼女は、彼との関係を弁証法的に止揚するんだ」と解説し、映画のタイトル「夜よ、こんにちは」について１８３０年生まれのアメリカの詩人エミリー・ディキンソンの詩「こんにちは、真夜中よ」から取っていることを明かしている。
　ディキンソンについては、彼女が詩の中で詩人の役割は暗闇を明るくすることではなく、暗闇の中に小さな明かりを灯すや、すぐに消え去っていくことにある、と謳っていたのを覚えている。ディキンソンの詩を想起させる監督からは、君たちがもし大衆を主人公とする革命をめざしているのであれば、君たちが行うことは大衆の心を冷やす殺人行為などではなく、大衆の心に火を灯す行為ではないのか、という「赤い旅団」に対する声が聞こえてくる。その声は映画の中で「愚かで、気違いじみている」と旅団のモロ誘拐を批判する女主人公の同僚にも、また、解放された「モロが路上を自由に歩いてい

る」夢を繰り返しみるキアラにも託されているのが読み取れる。つまり、「旅団の極端なテーゼに拠らずに政府に平和的に抵抗する可能性を提示する」立場ということだ。「ただキリスト教民主党の党首であるというだけで」、モロを殺して一体なんの意味があるのか。「まったくの非人間性」がそこに曝けだされているだけではないか、と監督は主張しているのである。

母親が自分の５人の子どもを殺したアンドレア・イエーツ事件について、ジジェクが「恐ろしいと思われるかもしれないが、我々はアンドレアが犯したような行為を非難しているだけではダメで、人を解放する隠れた潜勢力をここに嗅ぎ分けるべきなのだ」（エッセイ「現実界の砂漠へようこそ」）と語っていたことを、ここで想い起こす必要があるかもしれない。モロ誘拐、殺害を「非難しているだけではダメで、人を解放する隠れた潜勢力をここに嗅ぎ分けるべきなのだ」ろうか。しかし、一体どんな「人を解放する隠れた潜勢力」が嗅ぎ分けられるというのか。ジジェクの言葉を取りだしている山城むつみは『新潮』の連載コラム（０６．７）で、更にジジェクの『ジジェク自身によるジジェク』の中の次の言葉も引用している。

《私たちがますますもって必要としているのは、私たち自身に対するある種の暴力なのだということです。イデオロギー的で二重に拘束された窮状から脱出するためには、ある種の暴力的爆発が必要でしょう。これは破壊的なことです。たとえそれが身体的な暴力ではないとしても、それは過度の象徴的な暴力であり、私たちはそれを受け入れなければなりません。そしてこのレヴェルにおいて、現存の社会を本当に変えるためには、このリベラルな寛容という観点からでは達成できないのではないかと思っています。おそらくそれはより強烈な経験として爆発してしまうでしょう。そして私は、これこそ、つまり真の変革は苦痛に充ちたものなのだという自覚こそ、今日必要とされているのではないかと考えています。》

ジジェクによっても、この個所を引用している山城むつみによっても、どうしても語られていないことが、ここに逆に大きく浮き彫りにされている。《現存の社会を本当に変えるためには》破壊的な、《ある種の暴力的爆発が必要で》あり、《私たちはそれを受け入れなければな》らない。その通り、だが我々にとってのその《ある種の暴力的爆発》は、常に「組織に属すること」においてなされるということを忘れてはならない。個人的な《ある種の暴力的爆発》がいくら高まったところで、それらが有機的に結合されずにバラバラであれば、拡散するばかりであり、《現存の社会を本当に変えるためには》、組織が、それも単なる組織ではなく、革命的な理論（イデオロギー）に基づく革命的な組織が必ず存在しなくてはならない、とどうしても考えられている。したがって、《真の変革は苦痛に充ちたものなのだという自覚》は、個人から組織に移行され、組織がその自覚を「革命のためには非情であることを避けてはならない」という覚悟に変えて、メンバーに対し「非情」の実行を強制するようになっていく。

５人の自分の子どもを殺したアンドレアも、《厳格でカルト的な（？）キリスト教指

導者に帰依して》おり、《女は可能な限り多くの子どもを産むべきだという教え》や、《子どもをキリストの道から外れさせるくらいなら自殺するほうがましだという教え》に大きく影響されていたらしく、重度の出産後抑鬱症（ＰＰＤ）に罹(かか)っていた可能性のある彼女は、《自分のことを顧みることなく、ただひたすらに夫のため、子どもたちのため、病気の父親のため、自己犠牲的、献身的に尽くした。「汝自身を愛するように汝の隣人を愛せ」という命法を文字どおり実行しようとしていた》。しかし、彼女にはそれがとことん実行できなかった。供述によれば、《悪い母親である自分が育てると子どもたちが致命的に堕落してしまう、そうなる前に殺したほうが子どもたちは天国に召し上げられると考えたのだ、と。自分の中にはサタンが住んでおりこのサタンを退治するには自分が死ぬほかないと考えて何度か自殺を試みたがうまくゆかず、ついにサタンの命令に従って殺した、とも。》

多くの人は彼女が考えるように、自分の思い通りに子どもが育てられなくても、母親の自分が自殺したり、子どもを殺すということにはならなかった。自分を戒めたり、子どもを叱ったりすることで、日々の微調整を図っていた。自分が自殺したり、子どもを殺さねばならなくなるほど深刻とは思わなかったし、またそこまで追い詰められるような信条のようなものを持っていなかった。だが、カルト教団に属していたらしい彼女は違った。彼女の子育ては、キリストの道を踏み外してはならないという戒律が重たく伸し掛かっていた。単なる子育てではなく、戒律の中での子育てであった。戒律が守れなければ子育ては一切無意味であり、自分が死ぬか、子どもを殺すか、によって子育てを解消するほかないと思い込まれていた。教義を捨てても、別の方法で子育てを続けていこうという選択肢はそこにはみられなかった。

事件の悲劇は、アンドレアが自分よりも自分の子どもよりも、教義の実践や戒律の固守を優先したところにあった。少なくとも彼女が教義や戒律から自由になれば、悲劇は起こらなかった。もちろん、彼女は解放されなかった。彼女は彼女自身として生きているよりも、カルト教団の中の彼女自身としてしか生きようとしなかったからだ。つまり、組織の一員として生きることに埋没していたのである。そう考えられる。ところが、《ジジェクはアンドレアの残酷な暴力の原因を、ほかでもないこの隣人愛の姿勢に見ようとするのだ。》事件を、隣人愛をどのようにして行使するか、という点に引き絞って捉えようとするジジェク自身、「過度の残酷さはキリスト教的愛の必然的裏面なのだ」と断言するように、「汝自身を愛するように汝の隣人を愛せ」という命法の残酷さや、不可能性を洞察していないわけではない。そのことを承知の上で彼は主張するのだ。

《彼の力点は、キリスト教的な愛をそれが秘める残酷さゆえに否定することにはない。逆に、「愛ある攻撃性」という倒錯的な核においてキリスト教の遺産を継承せよと言うのだ。愛が秘めている攻撃性を「人を解放する隠れた潜勢力」として肯定せよ、と。》

こう考えるなら、あとは一本道を直進するだけである。愛の裏面にはたえず攻撃性がこびりついているなら、その攻撃性を避けて愛を受けとめることなどけっしてできない。

ならば、攻撃性を避けて愛からも遠ざかるか、愛を受けとめるために攻撃性も浴びつづけるか、どちらかしかない。
《近き人、隣人を愛せという命令は、その愛にたちこめる「暗い可能性」（キルケゴール）のただ中でその奇蹟に賭けよという命令にほかならないのではないか。賭けに負ければ、残念ながら十中八九そうなるのだが、アンドレアの場合のように、攻撃的な暴力（殺人）か、自己破壊的な暴力（自殺）か、いずれにせよ深刻な悲劇が結果してしまうだろう。しかし、たとえ万に一の確率であっても、賭けに勝ってかの奇蹟的なパッサージュを引き当てることができれば、隣人愛は、事前の悲壮で悲劇的な深刻さとは打って変わって、バカバカしいような非暴力の喜劇（…）として成就するだろう。この場合、近き他者、隣人を愛するとはついには、破壊的な暴力に転じる多大なリスクを承知でそのような非暴力（単なる暴力の否定、単なる暴力反対ではない非暴力）の喜劇に賭けるということにほかならない。恐らくアンドレアも子どもたちに対する自己犠牲的な愛のただ中で賭けねばならぬ一瞬があったのであり、そして、不幸にも負けたのだ。その結果があの残酷劇、あの暴力的な悲劇だったのだ。》
　そうだろうか。《アンドレアも子どもたちに対する自己犠牲的な愛のただ中で賭けねばならぬ一瞬があったの》だろうか。隣人愛の「暗い可能性」という文脈の中で、そう思い込まれただけではないのか。おそらく彼女にはそんな《一瞬 》などなかった。なぜなら、彼女は自分を愛するように自分の子供を愛したわけではなかったからだ。彼女は（カルト教団の中の）キリストを愛するように、（そうであろうとするキリストの）子どもを愛そうとしたのである。彼女が５人の子どもを産んだのも、子どもをキリストの道を歩むように育てようとしたのも、彼女が属するカルト教団の教えであって、自分の意思で行ったわけではなかった。彼女の意思は教団に預けられていたのだ。隣人愛は教団の教えであったから忠実に守られようとしていたのであって、教団の教えでなければ彼女はたぶん隣人愛とは無縁であった。そのような隣人愛にほかならなかったから、彼女にとっては隣人愛のリスクに負けたことではなく、教団の教えを守れなかったことのほうが問題であったと思われる。
　ジジェクの考察には組織の観点が決定的に欠落していたし、山城むつみも事件そのものよりも、ジジェクの力点に向き合うことになってしまったが、やはり問いは隣人愛であれなんであれ、「現存の社会を本当に変える」のに、組織を通じてしか、組織に属することによってしかなしえないか、という根本的なかたちをとって浮かび上がってくる。それは、映画『夜よ、こんにちは 』にも当てはまる。女主人公が繰り返し、解放されたモロが街路を自由に歩いている夢を見る場面を描くことで、そのような可能性もあったというイメージを観客に焼き付けようとしていたが、そんなイメージも現実に殺害されたモロの葬儀の場面の前では虚しいだけであった。「赤い旅団」のメンバーが組織的行動から解放されないかぎり、モロは絶対に自由になることはできず、処刑を免れえなかった。

モロ誘拐実行犯のブラゲッティが事件を振り返って、「この経験で恐ろしいのは、イデオロギーに盲目になるあまり、私たちが完全に人間性を失ってしまっていたということだ」と言うとき、なぜ「イデオロギーに盲目にな」ってしまったのか、という疑問への一瞥がそこには抜けており、故にまた繰り返されることが示されている。「イデオロギーに盲目になる」のは、イデオロギーによって成り立つ組織の一員として行動してしまうからである。もしイデオロギーから自由になろうとするなら、組織的行動から自由にならなくてはならない。女主人公の同僚が旅団を「愚かで、気違いじみている」と言ったとしても、彼が理想を成就するために組織に属することになれば、旅団と同じ行動を強いられることになるのだ。旅団が「愚かで、気違いじみている」ようにみえるのは、組織に属さない個人の場所から見ているからであって、彼のような暴力と無関係な、平和的な雰囲気を漂わせる好青年が、理想の実現を急進的に迫られたとき、「愚かで、気違いじみている」組織的行動をしばしば取らざるをえなくなってしまうのである。

０６年のカンヌ国際映画祭で最高賞「パルムドール」を受賞した、ケン・ローチ監督の『麦の穂をゆらす風』もまた、アイルランド独立戦争の中での兄弟の引き裂かれた悲劇を息詰まるような緊張感をもって描きながら、組織の視点が欠落しているのを逆に大きく浮かび上がらせている。先の『夜よ、こんにちは』が問題作であるように、この映画もまた問題作にちがいない。映画パンフには、どのような問題作であるかが解説されている。

《カンヌでの上映前から英国マスコミは、本作の題材を知ると大論争を始めた。今も北アイルランド問題を抱える英国にとって、世界中からの尊敬を集めるケン・ローチ監督が、英国が支配していた時代のアイルランドを描くことが何を意味するのか。本作が、賛否両論を巻き起こすのは必至だった。タイムズやデイリー・メール紙が「これは反英国映画だ」「ローチはなぜ自分の国を嫌うのか？」と批判すれば、ガーディアン紙はローチの「（批判と戦う）準備はできている」という言葉を掲げて擁護にまわり、この論争はアイルランドやオーストラリアにも飛び火。劇場公開後も議論は白熱し、図らずも今年もっともマスコミを騒がせた問題作になっている。》

ローチ監督はインタビューで、「この映画は英国とアイルランドの間の歴史を語るだけでなく、占領軍に支配された植民地が独立を求める、世界中で起きている戦いの物語であり、独立への戦いと同時に、その後にどのような社会を築くのかがいかに重要かを語っている」と述べ、カンヌ映画祭でも、「私は、この映画が、英国がその帝国主義的な過去から歩み出す、小さな一歩になってくれることを願う。過去について真実を語れたならば、私たちは現実についても真実を語ることができる。英国が今、力づくで違法に、その占領軍をどこに派遣しているか、皆さんに説明するまでもないでしょう」と語った。彼が１９２０年代のアイルランドを舞台に独立戦争について描きながら、けっして過去に起こった出来事ではなく、現在の国際情勢を貫く本質的なテーマにまで射程に収めようとしているのが、それらの発言から伝わってくる。

１９２０年のアイルランドが置かれている状況に触れながら、ストーリーを追っていくことにする。《長きにわたるイギリスの支配のもとで、アイルランドの人々の暮しは苦しいものだった。／富と繁栄は、イギリス人の支配階級や、イギリスに協力的な一部のアイルランドの富裕層に限られていた。／飢饉、立ち退き、貧困が市井の人々の宿命だった。彼らはアイルランド独自の言葉（ゲール語）を話すことを禁じられ、ハーリングなど独自のスポーツを楽しむことさえ禁じられていた。／そんな中、アイルランド独立を求める人々の叫びが大きくなるが、その動きを封じようとイギリスから冷酷な武装警察隊“ブラック・アンド・タンズ”が送り込まれた。》（映画パンフ）

映画はアイルランド南部の町、コークで若者たちがハーリングを楽しむ場面から始まる。ハーリングは木製のスティックとボールを使って得点を競うホッケーの前身のようなスポーツで、アイルランドの伝統的な国技である。ゲーム後、優秀な医学生であるデミアンは故郷を離れてロンドンの病院で働くことになったために、家族同然のペギー一家を訪れて別れを告げようとする。そこへブラック・アンド・タンズがやってきて、禁じられているハーリングをやったことを咎め、若者たちを全員壁に整列させて侮辱的な尋問を始める。ペギーの孫で１７歳のミホールは英語名ではなく、アイルランドのゲール語で答えたために暴行され殺される。ミホールの葬儀が終ると、デミアンの兄テディをリーダーに、村の若者たちはアイルランド独立のために武器をとって戦うことを話し合う。だが、強大なイギリス軍相手の戦争に懐疑的なデミアンはそれに加わらず、ミホールの姉シネードを落胆させる。

ロンドンへ出発する日、デミアンは駅で運転手や車掌が暴行を受けながらイギリス兵の乗車を拒否する光景を目撃して、ロンドン行きを止め、独立戦争に加わる決心をする。武器を持たない彼らは警官隊の宿舎を奇襲して銃を手に入れ、各地でゲリラ戦を展開する。デミアンも戦士として日々たくましくなり、そんな彼らを村の人々は助け、シネードもまた闘争に加わり、支援していく。デミアンは独立への戦いを長く続けているダンに出会い、駅で抵抗していた運転士だった彼から、この戦いがアイルランドの貧しい人々を救うためであることを学ぶ。戦いは日に日に激しくなり、仲間が警官隊に襲われ、シネードとペギーらが暮らす家が焼き討ちにあう。兄のテディが密告によって捕まり、それが警官隊とつながっている大地主のもとで働く貧しい少年によるものだと知ったデミアンは、幼なじみの少年を自分の手で処刑し、そのことを少年の母親に告げに行くと、彼女から「二度と顔を見せないで！」と激しく拒絶される。

独立をめざす激しいゲリラ戦は各地でイギリス軍を苦しめ、ついにイギリスは停戦を申し入れ、戦いは終結する。ようやく自由と平和を手に入れたとデミアンたちは喜び、アイルランドの音楽とダンスで村の人々が自由を祝ったその夜、デミアンとシネードは初めて結ばれる。だが喜びはつかの間だった。イギリス軍は撤退し、双方で講和条約を結んだものの、その内容はアイルランドを完全な独立国にするものではなく、英連邦の自治領としての“アイルランド自由国”にほかならなかった。イギリスはアイルランド

から得られる利益を手放そうとせず、イギリス国王は総督として権限を持ちつづけ、しかもアイルランドの北の六つの郡はイギリスに残るために、アイルランドは分断されることになり、当然ながらアイルランドの中でこの条約をめぐって賛成派と反対派に分かれて、深刻な対立を生みだした。

イギリスとの停戦を受け入れて条約を結ぶか、それとも条約を拒否してイギリスとの戦いを継続するか。最大の岐路に立たされたアイルランドは停戦－条約の途へと歩みだすが、反対派との間で内線が勃発する。条約を自由へのステップと考える兄テディは政府軍のアイルランド自由軍で幹部になり、弟デミアンは完全な独立と貧しい人々の幸福を求めて条約に反対し、反乱軍に加わる。内線はかつての同志を、隣人を引き裂き、家族や兄弟を敵味方に分かって傷つけ合うように仕向けていく。シネードはデミアンに同調して二人の結束は硬かったが、ある日、テディたち政府軍が乗った軍用機が襲撃され、その報復として政府軍と反対勢力との間で戦闘が起こり、ダンは命を落とし、デミアンは捕らえられる。兄はこの戦いから身を引き、シネードと幸せな家族を築くように説得するために、牢の中でデミアンに会って裏切りと降伏を勧めるが、弟は拒否して兄の号令で処刑される。デミアンの遺書を持ってきたテディにシネードは、「二度と顔を見せないで！」と激しく拒絶する。

さて、デミアンを演じたキリアン・マーフィが、「人の命を救う医者から、その命を奪う側に立った」ことによって、彼の葛藤が始まったと語り、他においても多く「そのことがもっと悲劇的な結末へとつながっていく」式の紋切り型の言及がみられたが、それは理解が浅薄にすぎる。同じ医学生であったチェ・ゲバラが社会的な医者になろうとして革命の途へと飛び込んだように、デミアンもまた駅でイギリス軍の暴行を受けて血を流す人々の治療に当たるよりも、そのような暴行がなくなって人々の治療に当たらなくてもよいように、独立というかたちでの民族、社会、国の治療こそが最優先されるべきではないか、と考えたにちがいなかった。チェ・ゲバラと同様に、多くの医学生がメスの代わりに銃を手に持って革命に起ち上がる例が見られるが、彼らは医者の途を捨てたわけではなく、より大きな医者の途をめざそうとしたことは間違いない。

もちろん、デミアンは医者の途から人の命を奪う戦士に変身しただけではなかったか、としか考えられない場面がみられる。密告した罪で幼なじみの貧しい少年をデミアン自身が処刑する、なんともやるせない場面だ、このとき、デミアンは少年を処刑しただけでなく、自分自身をも処刑してしまったのである。それは後に彼が兄テディの手で処刑される場面として訪れるが、デミアンが少年の母から「二度と顔を見せないで！」と激しく拒絶する場面も、デミアンを処刑した兄テディにシネードが同じ言葉で激しく拒絶する場面の反復であった。悲劇の、問題の発端を少年の処刑に置いて考えてみる。密告した少年は独立の戦いに反対して、自発的にそうしたわけではなかった。おそらく彼は解雇や逮捕を恐れて、口にしただけにすぎなかった。だがそのためにテディは捕らえられ、組織は修復不能な損失を蒙った。したがって、密告者を放置できなかったにしても、

なぜ、その処置が少年の命を奪う処刑にならなくてはならなかったのか、が最大の問題であった。

カンヌの共同記者会見の場でケン・ローチ監督は、「誰かが自分の理想とか、正義、独立、自由を追求して、それに対して人々が抵抗すれば、それは当然、武力衝突へとつながってしまいますが、そこが問題なわけです。武力行使というのは、理想に対するそういう抵抗があるから起きて、映画の登場人物が直面した武力行使もこのたぐいです。それが起きた後、デミアンの中で何かが変わる。彼は最後までそれを抱えていますし、兄テディも永遠に癒えない傷を負います。私は、この二人は最後まで理解し合うことができないと思います。悲しいことに、正義という立場を得るにはそうした激烈なやりとりを通らなくてはならないわけです」と語っている。政府軍に属する兄と反対派に属する弟は、「最後まで理解し合うことができない」し、「悲しいことに、正義という立場を得るにはそうした激烈なやりとりを通らなくてはならない」という言葉は、ジジェクの、「真の変革は苦痛に充ちたものなのだという自覚こそ」が必要だという言葉と共鳴し合って聞こえてくる。

しかし、そう言う前にやはり考えなくてはならないのは、正義というものはそれぞれの組織的正義にほかならないという問題である。兄弟が「最後まで理解し合うことができない」のは、二人の正義が相容れなかったからではない。二人の正義がそれぞれ組織に囲われて、組織的正義に変質してしまっていたからだ。兄の正義と弟の正義はとことん話し合えばお互いに取り換えることもできるし、もっと広い正義へと辿りつくこともできる。だが組織的正義になれば、対立し衝突する以外にない。なぜなら、組織同士が相容れあうことは絶対にありえないからだ。相容れあうときは組織を解体しなくてはならない。兄は弟を助けたかったけれども、組織的正義を抱えこむかぎり、弟の組織的正義を抹殺しなければならないし、そのためにはどうしても弟を処刑しなければならなかった。兄は組織から抜け出さなければ弟を救えなかったし、弟も組織から抜け出さなければ自分を救うことはできなかった。

弟の死は組織の中の死として捉えることができるが、どの組織にも属していないようにみえる少年の処刑は組織の中の死として捉えることはできなかった。少年の裏切り（？）は組織の裏切りではけっしてなかった。少年を助けたかったデミアンは、組織のけじめとして少年を処刑したのである。少年は組織的正義の犠牲にほかならなかった。デミアンは少年の幼なじみの知り合いとしてではなく、あくまでも組織人として少年を処刑したのだ。だから彼自身も組織人として処刑されなくてはならなかった。正義がどうしても組織を通じてしか成就しえないと思い込まれていることが問題であったのだ。組織的正義が少年の命を救う方向にではなく、少年の命を奪う方向にしか発揮しないことが、したがって組織のメンバーの命を奪っていく方向でこそ、最大の威力を発揮してしまう、そんな歪つな正義として変質するようになる組織の力学にこそ、もっと真正面から向き合わなくてはならないのではなかったか。　　２００６年１２月１７日記